

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

霧多布湿原サイト

－北海道厚岸郡－

霧多布湿原は北海道東部の太平洋に面して広がる、国内で3番目の広さの湿原です。この地域は日本でもっとも冷涼な地域であるため、低地でありながらツルコケモモやガンコウラン等高山で見られる植物が多く生育しています。5月から8月には、ワタスゲの綿毛や、ゼンティカ、ノハナショウブ、タチギボウシ等、様々な花が見られます。湿原の一部は「霧多布泥炭形成植物群落」として国指定の天然記念物に指定されており、ラムサール条約湿地にも登録されています。また、2021年には厚岸霧多布昆布森国定公園に指定されました。さらに、日本で初めてナショナルトラスト運動（自然保护等を目的とした土地の購入）が導入された湿原でもあり、様々な形での保全活動が行われています。



2025年度の調査結果概要

霧多布湿原サイトでは、2017年度からモニタリングを開始し、今年度は3回目の植生調査を7月28、29日及び8月10日に実施しました。

調査地全体はヌマガヤ、ムジナスゲ、ワタスゲを中心とする中間湿原で、調査ラインの途中からパッチ状にチャミズゴケやスギゴケからなる直径1~2mくらいのブルテ（小凸地）が発達しています。

調査ラインに沿って設定された方形区内で見られた変化としては、希少な植物であるイトナルコスゲ（カヤツリグサ科）とヒメツルコケモモ（ツツジ科）が初めて確認されました。また、調査ライン終点付近の「ヌマガヤ群落」の方形区では、ヌマガヤ、ワタスゲが減少した一方でムジナスゲ、シカクイが増加していました。加えて、今年度調査では、1か所の方形区内のチャミズゴケからなるブルテがシカ道により半壊している様子が確認されました。

【調査者・調査協力者】
加藤ゆき恵（釧路市立博物館）、佐藤雅俊（帯広畜産大学）、持田誠（浦幌町立博物館）、内田暁友（蘚苔類研究者）、越智颯斗・青山風花・樋口綾（霧多布湿原ナショナルトラスト）、野原精一（福島県尾瀬保護調査会）、横井謙一（日本国際湿地保全連合）



方形区内では初めて確認されたイトナルコスゲ（カヤツリグサ科）
絶滅危惧II類（環境省レッドリスト）



方形区内の植生を調査する様子



タチギボウシ



ミカヅキグサ



シカ道によりチャミズゴケからなるブルテが半壊した方形区

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

八甲田山湿原サイト

—青森県十和田市—

青森県南部に位置する火山群である八甲田山系には、低標高域から高標高域まで、小規模な湿原が多数点在しています。世界でも有数の豪雪地帯であり、湿原群は過去の火山活動や積雪の影響で成立したと考えられています。八甲田山湿原サイトでは、硫黄岳（標高1,360m）及び石倉岳（標高1,202m）の南部に位置する高田谷地湿原内の6か所に20mの調査ラインを設定し、それぞれ5個の方形区（計30方形区）を設置しています。



調査地の景観

2025年度の調査結果概要

八甲田山湿原サイトでは、2009年度からモニタリングを開始し、今年度は6回目の植生調査を8月1日に実施しました。

調査地で優占する植物種は、湿原内の局所的な環境要因によって多少変化しますが、概ねヌマガヤ、ワタスゲ等の湿生草本が見られます。

調査ラインに沿って設定された方形区内では、30種が確認されました（前回2020年度は35種）。全体的には、ヌマガヤ、キンコウカ、ミヤマイヌノハナヒゲ、イワイチヨウ等が優占して見られました。

前回調査と比べて種組成に大きな変化は見られませんでしたが、前回調査と同様、湿原の入り口付近においてヨシの生育が目立っていました。

【調査者・調査協力者】

佐々木雄大・岩知道優樹・山梨満里奈・野中駿・川村健心（横浜国立大学）、
青木美鈴（日本国際湿地保全連合）



キンコウカ



タチギボウシ



植生調査の様子
調査ラインに沿って方形区内の植物の種類や被度を調べています



コオニユリ



湿原の入口付近で見られたヨシ

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

八幡平サイト

—岩手県八幡平市—

八幡平は、岩手県、秋田県に広がる奥羽山脈北部の山塊であり、山頂部が広く平坦なことから、「平」という名前が付けられています。火山現象と多雪によって生み出された数々の湖沼や湿原には、標高差や残雪の影響等により様々な植生が見られ、多様な生態系が形成されています。本サイトでは、八幡平山頂付近に位置する八幡沼の周囲に広がる湿原（八幡沼湿原）及びその東方約2kmに位置する黒谷地湿原に調査地を設置しています。これらの湿原では、観光者等の踏みつけによる植生の荒廃や裸地化が問題となり、湿原の再生事業が行われています。



調査地（黒谷地湿原）の景観



黄変したイワイチョウの葉

2025年度の調査結果概要

八幡平サイトでは、2016年度からモニタリングを開始し、今年度は4回目の植生調査を8月26日に実施しました。本サイトでは、八幡沼湿原内及び黒谷地湿原内に調査ラインを1つずつ設けており、それぞれの調査ラインに沿って方形区が設定されています。

八幡沼湿原内に設けた方形区ではショウジョウスゲ、ヌマガヤ、イワイチョウが優占していました。また、ライン中央部付近の方形区では、イボミズゴケやワタミズゴケのマットが前回調査同様に確認できました。方形区内で見られた変化としては、生育するイワイチョウやコバギボウシの一部の個体が黄変していました。

黒谷地湿原内に設けた方形区ではヌマガヤやワタスゲが優占していました。また、前回調査同様にライン中央部の方形区にはシモフリゴケが見られ、それ以外の方形区ではワタミズゴケのマットを確認することができました。さらに、前回調査では花を確認できなかったヤチランの花を確認することができました。

【調査者・調査協力者】

竹原明秀（岩手大学）、島田直明（岩手県立大学）、野原精一（福島県尾瀬保護調査会）、上野綾子・丸山啓太（日本国際湿地保全連合）



シモフリゴケ



方形区内の植生を調査する様子

方形区内の様子
ショウジョウスゲ、ヌマガヤ、イワイチョウが優占していました

ヒメシャクナゲの実